

資料涉猟余話

その124

このところ篆刻から引き続き尾林焼／天竜峽焼の消長を調べている。ツテを辿って、尾林焼／天竜峽焼の作品の写真を撮らせてもらって、その作者（口ク

の作品は手びねり（竹篋のみ使用）なので、凸凹が多く、焼き物とはいえず、どこかが破損すると捨てられているというのが現状だ。

南海さんって誰？

嶋 不 濁

と一緒に出してくれらる、仏像やら達磨やら時には花瓶やぐい呑などの作者で、聞けば「南海さん」であるという。作品の所蔵者ももう孫曾孫の代になっていて、

例によって『郷土美術全集 飯田・下伊那 後編』平成15年7月）他、名前が出ていそうな郷土の人物誌をあたってみるが確認できない。しかし、明治末か大正10年6月7日

と8日に、「奇人とは」の小見出しで、「和田南海」のことが描かれている。7日の記事によれば、「岐阜県郡上八幡町の生まれだが、現在は本郡千代村米川に居住して、茶器や湯のみに達磨の模様を彫刻し、生まれた儘の原始的のやうな生活に甘んじている。妻子とも五名連れ

のみに達磨の模様を彫刻に於いては特殊の技法を有し」とあるが、尾林焼では南海が腕を振る場がなく、松尾村毛賀沢橋付近にささやかな間借りをして土だけはお茶碗一個と竹箸が二本、米を炊く土鍋とがあるばかりであつたがそれでも米を買って（残れば酒を）叫り付けては鬱を晴らしてゐた。酒が醒めれば置物を焼いては同好者に頒ち

一の道具だった。「南海君の生活状態が既に超越してゐて家に枕に大の字の高軒は飯茶碗一個と竹箸は飯茶碗一個と竹箸が二本、米を炊く土鍋とがあるばかりであつたがそれでも米を買って（残れば酒を）叫り付けては鬱を晴らしてゐた。酒が醒めれば置物を焼いては同好者に頒ち



高森町 個人蔵



典型的な南海作品(天龍堂美術蔵)

紹介する記事である。